

市民研 通信

No.12

2012年6月

通巻140号

●市民研ホームページに掲載中の最新の論文

～すべてどなたでもダウンロードできます

巻頭言

知られざる研究問題・薬学部6年化とその影響
福島のコメ農家を訪ねて

集会資料

「市民のための放射線防護を考える・連続勉強会」
第1回「ICRPは黄門さまの印籠か？」(5月20日)
第2回「食品放射能汚染対策—いま必要なのは？」(6月3日)

報告 市民科学談話会(5月12日)

AAAS(全米科学振興協会)年会に行こう！
三輪佳子(フリーランス・ライター)

書評

『不妊を語る：19人のライフストーリー』(白井千晶/海鳴社2012)
評者：本島玲子((株)メディカルトリビューン)

翻訳

『携帯電話—技術、曝露、健康影響』
原文は Environment and Human Health, Inc. による “Cell Phones: Technology, Exposures, Health Effects” (2011年全72ページ)

日本語概要『業務用IH調理器と調理士の健康』

原文はスイス連邦政府発行(2011年11月)の研究結果報告(全93ページ)の概要
Magnetfeld-Expositionen durch professionelle Induktionskochherde
— Gesundheitsschutz am Arbeitsplatz

●会員向け送付資料

- 論文「食品の放射能汚染 新暫定基準の問題点は？」(上田昌文)
- 報告「農民と消費者の進む道を考えて！ 内部被曝を知る」
- 講演録「大学教育に活かす課題解決型学習」(上田昌文)

●市民研が主催・共催するイベント

- 市民のための放射線防護を考える勉強会 第3回「今中哲二さんを囲んで」
6月16日(日)14時～ 湯島第二会館 会議室
- 第9回市民科学談話会「“バイオ化する社会”を考える」
6月17日(日)14時～ 市民科学研究室にて(講師：粥川準二さん)
- シリーズ「語る+聞く生殖のいま」(1) 助産士・富田江里子さんを招いて
7月3日(火)昼の部14時～夜の部19時～ とともに渋谷の「光塾」

知られざる研究問題・薬学部6年化とその影響

横山雅俊(市民研・理事)

今から6年前、日本の大学の薬学部で、薬剤師国家試験の受験資格を得られる課程が6年制になり、その第1期生が今年いよいよ世に出た。

薬学部6年化の動きは以前から存在し、日本薬剤師会や厚生労働省などの悲願であったが、文部科学省や国立大学の側では、反対論が根強かった。10年前、文部科学省「薬学教育の改善・充実に関する調査研究協力者会議」(以下、協力者会議)において、最終的に6年化が提言され、関連法規の改訂を経て正式決定した。

実は、その協力者会議での議論は、驚くほど貧相だった。6年化推進派の見解は、諸外国の薬剤師養成が5年ないし6年間「だから、学部教育の連続性が重要」なるほぼ一点に尽きる。「学部4年+大学院修士2年」を主張する国公立大側と、「学部6年」を主張する厚生労働省、日本薬剤師会、私立大学という綱引きにほぼ終始している。

その薬学部6年化において、最大の目玉は半年間の臨床実務実習である。実は、薬学部6年化が正式に決定してから、そのシステムの設計が始まった。残念ながら、協力者会議での議論でも、大学教育の中で何をどう組み込み、全体のバランスをどう取るかという問題意識は、臨床関係者の側には希薄だったようだ。

一方、薬剤師たちの当事者意識は概ね冷ややかで、薬学部を志願する高校生や浪人生は減少傾向にあり、6年制薬学部の学生たちは、非常に危機意識を持っているようだ。また、人材需給や生命科学の研究、社会貢献の多様性の観点からは、国立大学の関係者からの批判が根強い。

さて、こうした問題は、実は市民社会においては殆ど知られていないのではないかと。他方で、学部生、院生、大学教員、製薬企業の開発研究者、薬剤師など、各セクタ間での交流は盛んではない。

筆者は今秋開催予定の科学コミュニケーションの祭典「サイエンスアゴラ2012」において、研究問題ワークショップ「本音で語る」シリーズでこの薬学部6年化問題を取り上げたいと考え、準備を進めている。薬学の持つ学際性や社会との接点の広さは、科学コミュニケーションの題材として重要なものだと筆者は考えている。■

福島のコメ農家を訪ねて

林衛(市民研・監事)

福島県大玉村は、中通りのなかでも、原発震災発生直後に汚染ブルームの最も濃厚な部分が通過した阿武隈川よりやや西側にあり、安達太良水系を用いた水田地帯が広がる。

その地で農業生産法人を経営し、高品質に期待するお客様の信頼に応え、コメ生産を拡大してきた鈴木博之さんのもとを春以降、2度訪問した。先祖代々培ってきた「土性を損壊した」と東京電力を訴えるべく準備を進めている鈴木さんたちの支援をしたいと考えたからだ。政府指示による公的避難を強いられている自治体・地域とは異なり、中通りでは、あらゆる被害を自ら訴え、加害者に認めさせないと、償いはいっさい得られない。

農業資材を提供する営業マンによると、2011年度県内では自家保有米と縁故米が落ち込み、その分、農協買上米が増えたという。農協買上米は、ブレンド産地の第3位以下は表示不要のルールによって、宮城や山形産米に隠れ全国へ流通。県内消費の不足分は、お隣の新潟産米がよく売れて補った。県北の汚染が深刻だと情報はよく知られていて、福島飯坂インターそばのスーパー直販コーナでは、地元産小松菜が1パック100円と格安なのにもかかわらず、山積みのまましなびているのが痛々しかった。

チェルノブイリ原発周辺に近い土壤汚染がみられるのに対し、内部被曝の計測値に低めのものが多いのは、土壤中でセシウムを吸着する粘土質が多いことに加え、除染や測定の実績、食品流通の発達によるところが大きいらしい。

こんな状況からも予想されるとおり、農協を通さず県内外のお客様に直販してきた鈴木さんの売上は壊滅的だった。5Bq/kgでもそれ以下でも売れないのだが、鈴木さんは決してお客様のせいにはしない。

東京電力は、鈴木さんの生産した高品質米を食べる喜びをお客様から奪った。生産者も消費者も被害者だ。手を携え加害責任を追及したい(連携・支援の不足ゆえ、「子どもは放射能に強い」とか「米ソ核実験時代よりも被曝量が少ないから」といった安全論が混乱に拍車をかけている問題は別途論じた)。■